

2020年5月17日(日)／説教者：國分美生

説教：「イエスさまは灯し火」

聖書：ルカによる福音書24：13～35

エマオに向かう二人の弟子は、イエスの死に対する悲しみや不安やで混乱していたことでしょう。イエスの苦難の必然性や復活についても二人は受け入れることも、信じることもできなかったのです。神の御前でも、すべての人々の目の前でも、業と言葉に力のある預言者としてのイエスを弟子たちは信頼しイスラエル王国を復活してくださると望みをかけていたからです。

エマオの途上において弟子にイエスがはっきり姿を現したのは、いわゆる「ダメ押し」です。というのも二人は朝のうちに、マグダラのマリアはじめイエスの女弟子たちが「イエス様はよみがえられた」と証しているのを聞いていました。彼らを含む男弟子たちはそれをばかげた話だと思って全く信じず、絶望を抱えているしかありませんでした。ですから、そのような信じることのできない弟子たちにイエスがあえて姿を現してくださったのはキリストの愛と憐れみに他なりません。

聖書から解き明かしを聞いている間の二人の表情は読み取れませんが、32 節ではこの時二人の心が燃えていたことが明かされます。ここで「燃えていた」と日本語に訳されている言葉は、ギリシア語原典をみると「灯をともす」という意味もあり、福音書の中では「灯し火」という意味で使われていることのほうが多いです。この弟子たちが心のうちに情熱の炎がメラメラと燃えているということ以上に、彼らの絶望の暗闇の中に希望の光がともされたことがイメージできます。

イエス様の復活をお祝いしながらも、私たちは今、混乱や不安や心配事の中で気持ちを落ち着けて生活できなくなっているかもしれません。私たちはそのような時ほど深く主に信頼して、祈りながら歩んでいきたいものですが、そのような時でも、自分の努力や修行によって信仰を鍛えていくのではないことを再確認したいと思います。信じることのできない愚かな弟子たちの前に、信じることができるようにイエス様が現れたように、救い主への信頼は神から与えられるものだからです。

そしてその時私たちが信頼するのは、小さいけれども力強い、暗闇の中で輝く希望の灯し火であることを、いつも心に思い描きたいと思います。(國分美生)